

# 崇き心

【学校経営理念】「ひとりも一人にしない」

【校訓】「愛」

【学校教育目標】「心豊かで活力に満ちた生徒の育成」

R8.5.8(金) No.2

「生徒は伸びたがっている。その願いと身を焼くようなあこがれに応える。」

本校で授業巡視をしていた際のある授業での一コマです。

授業が始まって、男子生徒の1人が授業に必要なプリントがないことに気づき、机の中を探し出します。すると、隣の女子生徒が声を掛けます。

「どうかしたの。」

「いや、プリントが見つからないんだ。」

その後も男子生徒は教科書に挟んでないか、バッグの中に入れてないか懸命に探します。すると女子生徒が、再度、声を掛けます。

「大丈夫？」

「やっぱりないんだ。」

「先生に言ってみたら？」

「うん。もう少し探してみる。」

おそらく、そうした会話が交わされたのではないかと思います。その後、男子生徒は授業の合間を見計らって、先生にプリントがないことを伝えていました。

困っている人にさりげなく声を掛け、後押しをする優しさ、男子生徒の授業への気配り。思春期といわれる時期にも関わらず、そこには成熟した関係性があり、また、授業に真摯に向かう生徒の姿がありました。

ずいぶん前の話になりますが、私が通学していた高校には県内でも有名な英語のK先生がいました。白髪がトレードマークで学校には自転車で通勤されていたことを記憶しています。生徒、教師、保護者からの支持は絶大で、その先生から声を掛けてもらうこと自体が喜ばしいことで、その中でも「でかした！」と褒めてもらうことは、何よりも名誉なことだと今でいう都市伝説のような話が、高校では周知の事実となっていました。

私が高校1年の時、高校のルールに慣れないうえ、成績も芳しくなく、とてもくさっていたのを覚えています。課題は未提出、生活は不規則、そうなれば教師からの指導もたびたび入るといった負の連鎖でした。そんな折、いつものようにK先生の授業を受けていると、普段は指名もなさらないのに、突然、私を指名し、課題に答えるようにおっしゃられます。たまたま、私はその課題だけ友達に教えてもらっていたので、何とか答えることができたので

すが、すると、K先生は間髪入れずに、

「でかした！」

クラス中がどよめき、皆の視線が私に集まったことを鮮明に覚えています。

おそらく、K先生は私が学校に馴染んでいないこと、不満を抱いていることを気にかけてくださっていたのだと思います。そうした折、授業中に私がたまたま課題をしていることに気付かれ、この時とばかりに、「でかした」という言葉を、何の惜しげもなく、私に送っていただいたのだと、今なら容易に想像できます。

子どもたちはどの子も伸びたがっている。私たち教師は、できるようになる喜び、わかる喜び、できないときの悲しさ、わからないことの苦しき、それら子どもたちが抱くすべての思いと共にありたい。決して、子どもたちには、できない自分に慣れさせてはいけない。子どもたちの願いと身を焼くようなあこがれに、私たちは応えていく。それこそが私たち教師の矜持であり、やりがいである。

「下校時に子どもの顔が輝く学校づくり」を目指して。

文責 山崎 健二